

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530587

研究課題名（和文）教師と保護者の連携を促進する保護者面談の展開モデルの開発

研究課題名（英文） Development of an evolutionary model for guardian-teacher conferences to encourage cooperation between teachers and guardians

研究代表者

上村 恵津子 (KAMIMURA ETSUKO)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：30334874

研究分野：学校心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教育相談、コンサルテーション、教師、保護者面談、連携、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、発話分析

1. 研究計画の概要

本研究では、保護者にとってより援助的な連携を維持、促進するために、教師が保護者面談においてどのようなコミュニケーション行動をとることが有効なのかを明らかにすることを目的とする。このために、研究期間内に以下の3点を明らかにする。

- (1) 保護者と教師の面談場面の会話をグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下GTA）により分析し、保護者面談において教師がどのように保護者との連携を構築しているのか、そのプロセスについての仮説を生成し、教師が行う保護者面談の特徴を明らかにする。
- (2) 保護者面談における保護者の会話をGTAにより分析し、保護者面談における保護者のコミュニケーション行動の特徴を明らかにすると共に、教師と保護者の相互作用の視点から、保護者との連携を促進する教師のコミュニケーション行動の特徴を明らかにする。
- (3) (1)(2)で明らかにされた教師のコミュニケーション行動の特徴が、教師の対応に対する保護者の評価や連携に対する教師の達成感とどのように関連しているかを明らかにする。

2. 研究の進捗状況

平成19年度には、保護者面談のロールプレイにおける教師および保護者の発話を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより、面談で連携を構築するプロセスの仮説モデルを生成した。教師の仮説モデルを検

討した結果、教師が行う保護者面談の特徴は、教師が自分自身の対応を振り返り、対応策について積極的に提案する点であることが明らかになった。また、保護者の仮説モデルを検討した結果、自己開示的な発話に葛藤を表現し感情を整理する役割があると考えられた。

平成20年度は、実際の保護者面談における発話を仮説モデルを基に分析し、仮説モデルの検討を行った。教師および保護者のモデルを検討した結果、仮説モデルの全体構造に大きな修正はなかった。実際の面談においても教師と保護者それぞれが自分自身の対応を振り返る発話が関係構築の鍵になっていると考えられた。

平成21年度には、平成20年度までに作成した教師および保護者が面談で連携を構築するプロセスのモデルを基に、保護者面談における保護者と教師の発話のやりとりの相互作用の分析を試みた。相互作用の分析にあたっては、本研究における連携の定義から「同調性」「コミュニケーションの方向性」の2点で分析することとした。さらには、これら2点に加え、保護者の視点から「サポートに関する教師の発話状況」を分析の視点に加えた。ロールプレイ13件の面談の相互作用を分析した結果、コミュニケーションに偏りがあり、最後まで「非同調」が見られる面談の分析からは、教師が自らの価値観を頑なに主張したり、早急な振り返りや謝罪、対応策の提案を行ったりすることにより連携が困難になると考えられた。一方、面談途中で非同調がありなが

らも最後には同調に転じる面談を分析した結果、一方的に対応策を提案しながらも連携が促進されている面談においては、教師と保護者の意図にズレが生じた場面で教師がその葛藤を面談で取り上げていることが分かった。また、早急な振り返りや対応策の提案を行いながらも連携が促進されている面談では、情報を十分に共有してから対応策の検討に移行する展開となっていた。

3. 現在までの達成度

③ やや遅れている

(理由)

当初、平成 20 年度までに保護者および教師の発話分析を終え、平成 21 年度には質問紙により教師の面談特徴と保護者の満足度との関係を明らかにする予定であった。しかし、連携を促進する教師の発話および面談の特徴を明らかにするには、教師と保護者の相互作用の分析が不可欠と考え、平成 21 年度には当初の計画になかった相互作用の分析を試みた。このため、平成 21 年度終了時には当初計画で予定していた研究には至っていない。

4. 今後の研究の推進方策

当初の計画では、教師および保護者の質問紙データを分析し、教師のコミュニケーション行動と保護者の満足度および教師の達成感との関連を明らかにする予定であった。しかし、平成 21 年度に相互作用の分析を試み、分析の視点を明らかにし、ロールプレイの分析が終了した所である。次年度は、実際の面談の相互作用を分析する必要がある。これらのことから、本研究では、教師と保護者が面談で連携を構築するプロセスのモデルに基づき相互作用を分析し、この結果から、連携を構築する教師の発話特徴を明らかにすることとする。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 上村恵津子, 石隈利紀, (保護者面談における保護者の連携構築プロセスに関する研究—保護者の発話分析を通して—), 学校心理学研究, **8**(1), 59-73, 2008, 査読有
- ② 上村恵津子, 石隈利紀, (保護者面談における教師医の連携構築プロセスに関する研究—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる教師の発話分析を通して—), 教育心理学研究, **55**, 560-572, 2007, 査読有

[学会発表] (計 1 件)

- ① 上村恵津子, 石隈利紀, (保護者面談における保護者の連携構築プロセスに関する研究), 日本学校心理士会 2007 年度大会, 2007. 8. 11, 大阪